

柏市光ヶ丘遺跡

— 柏市光ヶ丘団地埋蔵文化財調査報告書 —



平成 10 年 3 月

住 宅・都 市 整 備 公 团

財團法人 千葉県文化財センター

序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第326集として、住宅・都市整備公団の柏市光ヶ丘団地建替事業に伴って実施した柏市光ヶ丘遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代の石器が出土し、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また、文化財の保護普及のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係者の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成10年3月31日

財団法人 千葉県文化財センター
理事長 中村好成

本文目次

Iはじめに	2
1 調査の経緯	
2 遺跡の位置と環境	
3 周辺の遺跡	
II調査の成果	6
1 調査の方法	
2 基本層序	
3 出土遺物	
IIIおわりに	9
報告書抄録	

挿図・図版目次

第1図 光ヶ丘遺跡周辺旧石器時代遺跡分布図	図版1 遺跡周辺の航空写真
第2図 光ヶ丘遺跡周辺地形図	図版2 調査区及び作業風景
第3図 石器出土地点	図版3 出土遺物
第4図 基本層序	
第5図 出土遺物	

凡例

- 1 本書は、住宅・都市整備公団による光ヶ丘団地建替事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県柏市光ヶ丘1,768-5ほかに所在する光ヶ丘遺跡（遺跡コード217-016）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、住宅・都市整備公団の委託を受け、財團法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業は、調査研究部長 西山太郎、北部調査事務所所長 谷 匂（～平成9年3月）、折原 繁（平成9年4月～）の指導のもと、下記の期間、下記の職員が実施した。
発掘調査 平成8年12月2日～平成9年2月27日 研究員 猪股昭喜、技師 黒沢 崇
整理作業 平成9年9月1日～平成9年10月31日 主任技師 綿貫 貴、技師 大内千年
- 5 本書の執筆は、技師 大内千年が行った。なお、石器の記載については、主任技師 落合章雄の協力を得た。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、住宅・都市整備公団、柏市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
第1図 国土地理院発行 1/25,000地形図「流山」(N1-54-25-2-1)「松戸」(N1-54-25-1-2)
- 8 本書で使用した図面の方針は、すべて座標北である。

I はじめに

1. 調査の経緯

光ヶ丘遺跡の調査は、昭和30年代に建設された公団光ヶ丘団地の建て替えに伴う事前調査である。住宅・都市整備公団により、光ヶ丘団地の建て替えに先立ち、千葉県教育委員会に対して、平成8年8月22日付けで「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会があった。これを受け、千葉県教育委員会による試掘が行われ、旧石器時代の遺物が出土したことから、より詳細な調査が必要との判断に至った。このため財團法人千葉県文化財センターが委託を受け、本格的な調査を実施した。

平成9年12月2日から平成9年2月21日に確認調査を行った。この結果、調査が必要であると認められた200m²について、平成9年2月22日から27日に本調査を行った。

整理作業は平成9年9月1日から10月31日に実施した。

2. 遺跡の位置と環境

柏市は、千葉県の東葛飾地域の北部に位置する。早い時期から東京のベッドタウンとしての役割を果たし、特に常磐線沿線の地区では、市街化が著しい。市の北側は利根川と接し、西側には流山市、松戸市を挟んで、江戸川が流れている。

光ヶ丘遺跡は柏市光ヶ丘1,768-5ほかに所在し、行政区画では柏市の南西端に当たる。流山市、松戸市との市境に近い。遺跡は標高約27mの台地上に存在する。西からは江戸川の支流である坂川のさらに支流である藤川に開析された谷が入りこみ、東からは手賀沼に注ぐ、大津川起源の谷がせまっている。大きく見て、江戸川水系と手賀沼（利根川）水系の分水嶺付近に存在する遺跡といえよう。

遺跡周辺は市街化が進み、現在では地形を観察することは困難であるが、遺跡付近の台地上は比較的平坦であり、周囲からやや急峻な深い谷が遺跡に向かって迫っている。

3. 周辺の遺跡（第1図）

千葉県埋蔵文化財分布地図⁽¹⁾によれば、周辺には多数の遺跡が存在するが、今回、光ヶ丘遺跡で確認した旧石器時代の遺跡は、ごく少ない。第1図は千葉県埋蔵文化財分布地図に基づき、光ヶ丘遺跡周辺で、旧石器時代の遺物が確認された遺跡をドット化したものである。

光ヶ丘遺跡（1）のごく近辺では、旧石器時代の遺跡は確認されていないが、遺跡の西方の松戸市域ではやや多くの遺跡で、旧石器時代の遺物が確認されている。藤川を挟んだ対岸の台地上では、仲通遺跡（14）で、Ⅲ層中からやまとまった石器集中地点が検出されている⁽²⁾。殿平賀向山遺跡（15）では、表土層中からであるが、珪質頁岩製の石器が出土している⁽³⁾。藤川と坂川の合流点付近に存在する幸田貝塚（12）からはナイフ形石器が出土している⁽⁴⁾。また、溜ノ上遺跡（17）ではⅢ層及びV層中で、まとまった石器集中地点が検出されている⁽⁵⁾。

遺跡の北西の流山市域では、主に江戸川低地を望む台地上で、旧石器時代の遺物が確認されている。上貝塚貝塚（2）ではⅢ層中の石器集中地点を検出している⁽⁶⁾。三輪山北浦（三輪山第Ⅱ）遺跡（5）では、Ⅲ層～Ⅶ層中の石器集中地点6か所を検出している⁽⁷⁾。また、加地区遺跡群（7～11）と呼称されている



第1図 光ヶ丘遺跡周辺 旧石器時代遺跡分布図

光ヶ丘遺跡周辺旧石器時代遺跡地名表

柏市

1. 光ヶ丘 26. 戸張城山(Ⅱ) 27. 林台

流山市

2. 上貝塚貝塚 3. 桐ヶ谷浅間後 4. 花山東 5. 三輪野山北浦 6. 三輪野山貝塚
7. 若宮第Ⅱ 8. 北谷津第Ⅱ 9. 北谷津第Ⅰ 10. 町畑 11. 若宮第Ⅰ

松戸市

12. 幸田貝塚 13. 東平賀 14. 仲通 15. 殿平賀向山 16. 境外Ⅱ 17. 潟ノ上
18. 行人台 19. 根木内 20. 内山 21. 上本郷 22. 千駄堀寒風(千駄堀) 23. 寒風台
24. 向山 25. 出来山

遺跡群中でも、旧石器時代の遺物が出土している⁽⁷⁾。

江戸川水系の台地上で比較的多くの旧石器時代遺跡が確認されているのに対して、光ヶ丘遺跡近辺の大津川水系の台地上では、旧石器時代の遺跡はほとんど確認されていない。戸張城山遺跡（26）で旧石器時代の遺物が出土しているようであるが、詳細は不明である。林台遺跡（27）では、旧石器時代と考えられる遺物が出土している⁽⁸⁾。

光ヶ丘遺跡周辺の旧石器時代遺跡の分布を大まかに述べたが、いくつかの傾向が指摘できよう。第1は、光ヶ丘遺跡のごく近辺には、現在のところ旧石器時代の遺跡が確認されていないこと。第2は江戸川水系の台地上に比較的の遺跡が多く分布し、大津川水系の台地上には遺跡分布が疎であることである。こうした遺跡分布は、本来的に旧石器時代の遺跡が存在しないと考えるよりは、人為的な作用によるものが大きいように思える。すなわち、光ヶ丘遺跡近辺の遺跡の少なさは、この地域が早くから市街化し、これまでに調査例が少ないことが理由と考えられ、江戸川水系と大津川水系の遺跡分布の疎密は、旧石器時代遺跡の調査の多寡が理由として考えられる。こうした意味で、今回光ヶ丘遺跡において旧石器時代の遺物が確認できた意義は大きい。

- 注 1 千葉県教育委員会 1997 千葉県埋蔵文化財分布地図（1）－東葛飾・印旛地区（改訂版）－
- 2 松戸市教育委員会 1994 平成5年度市内遺跡発掘調査概報
- 3 設楽博巳 1987 慶平賀向山遺跡 松戸市遺跡調査会
- 4 松戸市教育委員会 1971 幸田貝塚第1次（昭和45年度）調査概報
- 5 大森隆志 1995 潟ノ上遺跡 松戸市滀ノ上遺跡調査会
- 6 岡田光弘ほか 1996 主要地方道松戸野田線埋蔵文化財調査報告書（財）千葉県文化財センター
- 7 流山市教育委員会 1989 加地区遺跡群Ⅰ
流山市教育委員会 1991 加地区遺跡群Ⅱ
流山市教育委員会 1994 加地区遺跡群Ⅲ
- 8 柏市教育委員会 1983 高砂遺跡・林台遺跡
柏市教育委員会ほか 1989 林台遺跡



第2図 光ヶ丘遺跡周辺地形図

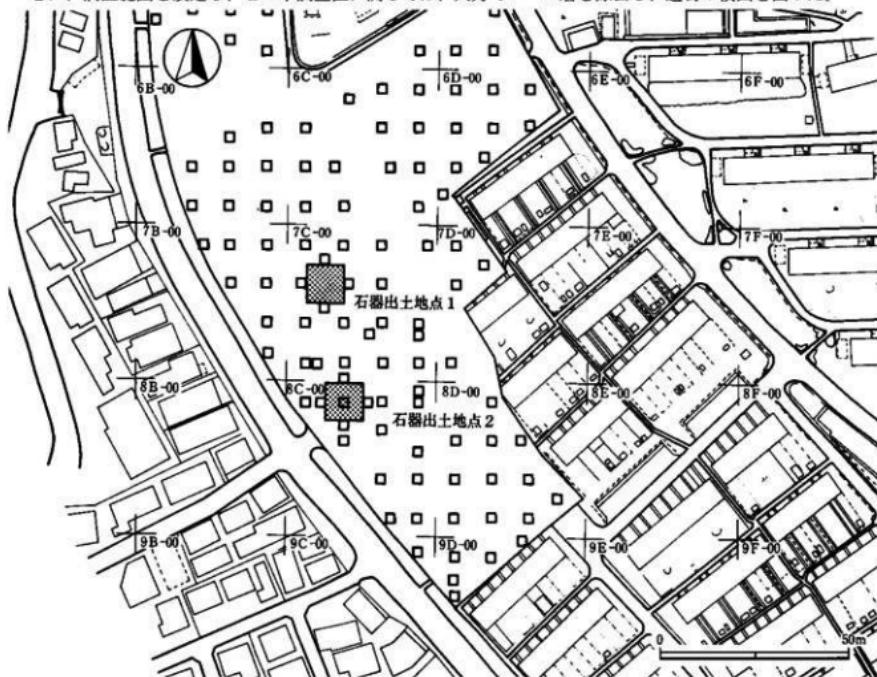
II 調査の成果

1. 調査の方法

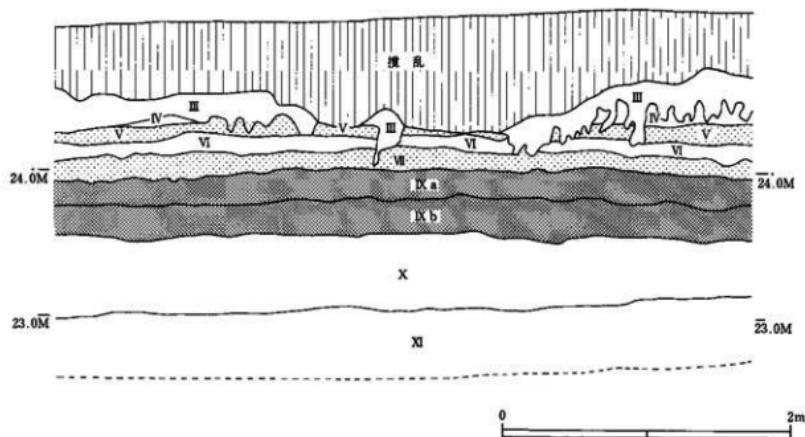
光ヶ丘遺跡の今回の調査地点では、県文化課による試掘の結果、縄文時代以降の土層がほとんど削平されており、上層構造が残存する可能性は絶望的であった。このため調査は、試掘で遺物が出土した下層、すなわち旧石器時代の確認調査から実施することとした。

調査の開始に当たって、調査対象範囲を覆うように、公共座標を基準としたグリッドの設定を行った。グリッドは40m×40mの方眼を大グリッドとし、この中を4m×4mの小グリッドに100分割した。大グリッドは北西杭を基準とし、北から南にA・B・C……、西から東に1・2・3……の名称を付けた。小グリッドは北西から南東に向かって順に00～99の番号をふり、両者を組み合わせてA 1-00というように呼称した。

確認調査は対象範囲33,345m²に対して1,124m²を行った（第2図）。調査はクラムシェルを用いて2m×2mの試掘坑を、グリッドにあわせて開けることで遺物の有無を確認した。確認調査の結果、遺物が出土した2地点に関して、合計200m²を本調査として実施することとした。本調査は遺物が出土した試掘坑を中心に、調査範囲を設定し、この本調査区に関しては、人力でローム層を除去し、遺物の検出を図った。



第3図 石器出土地点



第4図 基本層序

2. 基本層序

第4図は、7C-20グリッドにおける土層断面図である。この図に基づき、光ヶ丘遺跡の基本層序について記載する。なお、この断面図同様、今回の調査区内のはぼすべての試掘坑で、I、II層が存在せず、立川ローム最上層に相当するIII層もほとんどが擾乱された状態であった。擾乱層は建築廃材などを含んでおり、団地建設時に擾乱を受けたものか、団地解体時に大きく擾乱されたものか、判断に苦しむ。いずれにしろ縄文時代以降の土層は全く残存しておらず、記載はIV層以下からとする。

IV～VI層は、やや黄色味が強いIV層、第1黒色帯に相当するV層、AT（姶良丹沢火山灰）をブロック状に含み明るい色調のVI層とに区分した。このうちIV層とV層の色調差は微妙である。VII～IX層は第2黒色帯に相当する。VII層、IXa層、IXc層に区分した。VII層の上部にはATの拡散が認められる。IX層は赤褐色、黒褐色のスコリアを多く含むが、スコリアの大小及び多寡で上下に区分した。IXc層の方が比較的スコリアが多く、かつ大きい。IXb層に相当する層序は、本遺跡では識別できなかったが、IXc層中に暗茶褐色のブロック状の土が認められ、こうしたもののが本来IXb層に相当するものかもしれない。X層は立川ローム最下層である。少量の赤褐色スコリアを含む。XI層は武藏野ロームで、粘性が増し、縮まりをやや欠き、色調は暗くなる。

3. 出土遺物

遺物を検出したのは2カ所である（第3図）。7C-32グリッドを中心とした地点（石器出土地点1）と8C-13グリッドを中心とした地点（石器出土地点2）である。

石器出土地点 1

7C-32グリッドの南西で遺物を検出した。これは県文化課の試掘時に遺物を検出したものである。楔形石器の可能性があるもの1点（第5図1）と碎片2点を確認した。IX層中からの出土であるが、試掘時の遺物検出のため、細かい出土位置や出土レベルなどは記録し得なかった。周囲を拡張し、本調査を行ったが、他の遺物は検出できなかった。

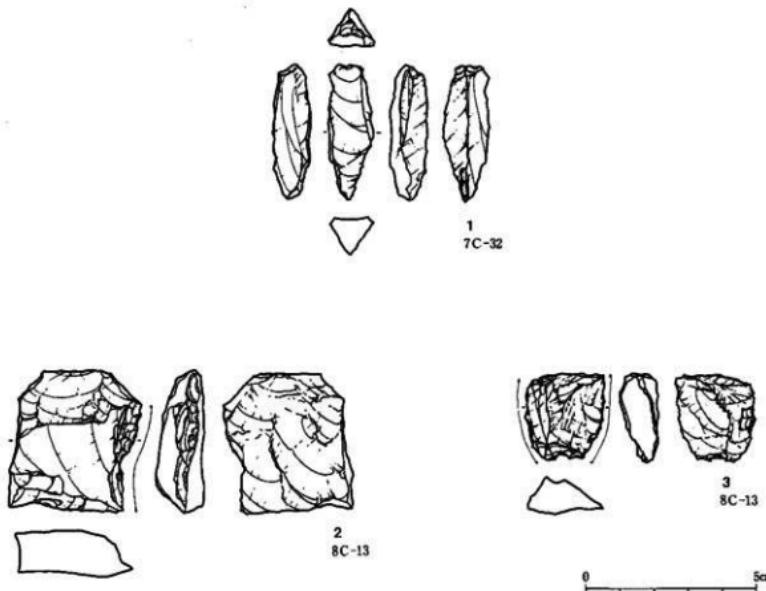
1は上下両端部に調整が入っており、楔形石器の可能性があるものである。石材はチャートである。最大長3.9cm、最大幅1.3cmを測る。重量は5.5gである。

石器出土地点 2

8C-13グリッドの北東2m×2mの範囲で遺物を検出した。クラムシェルを用いた確認時に遺物が出土したもので、石器2点（第5図2、3）を検出した。遺物はVII層～IX層で出土した。周囲を拡張し、本調査を行ったが、他の遺物は検出できなかった。出土した遺物は、機械を用いた確認調査中に出土したため、細かい出土位置、出土レベルについては記録し得なかった。

2はサイドスクリイバーと考えられるものである。右側縁に刃部を作出している。石材は安山岩を用いる。最大長4.1cm、最大幅3.6cmを測る。重量は27.0gである。

3はリタッヂドフレイクである。側縁に調整痕が存在する。整形のためか、刃部作出のためかは判断に苦しむところである。石材はチャートである。最大長2.6cm、最大幅2.2cmを測る。重量は6.4gである。



第5図 出土遺物

III おわりに

光ヶ丘遺跡では、断片的ではあるが、旧石器時代の遺物を検出した。これまで旧石器時代遺跡がほとんど確認されていない柏市南部地域において、旧石器時代遺跡の貴重な事例を付け加えることとなった。遺跡全体が、ほとんどハードロームまで攪乱されていたという、きわめて悪い遺存状況を考えれば、こうした遺物が検出できたことは、むしろ幸運かもしれない。逆に言うと、ここまで遺存状況の悪い遺跡でも、旧石器時代に関していえば、遺物が依存している可能性が高いということである。特に旧石器時代の遺跡に関しては、遺跡の見かけの現況にとらわれず、慎重に対応する必要があるだろう。

東葛地域は早くから市街化が進み、多くの建築物により、一見遺跡が残っていないように見える。しかしこの遺跡で明らかになったように、少なくとも昭和30年代の建物の下には、たとえそれが鉄筋コンクリートの建物であっても、遺跡が残存している可能性がある。少なくとも旧石器時代の遺跡は残存している可能性が非常に高い。光ヶ丘遺跡では不幸にも上層の大部分が攪乱されていたが、例えば目黒区大橋遺跡などは、昭和30年代の鉄筋コンクリート建物の基礎の下から、縄文時代から近代にわたる多くの遺構が検出されており、旧石器時代の遺物も検出している⁽¹⁾。武藏野台地と下総台地という条件の違いはあるが、この時期の鉄筋コンクリート建物の基礎は、それほど深くもなく、大きく遺跡を壊さない可能性が高い。これを裏付けるように、現在当センターで調査中の船橋市前原団地・新山東遺跡（2）でも、縄文時代中期後葉の遺構が、団地の建物の周囲からはもちろん、基礎の下からも検出されている。今後こうした昭和30年代に建設された初期の団地などの建て替えが進むものと思うが、遺跡の遺存状況に細心の注意を払う必要があろう。

注1 小林謙一ほか 1998 『目黒区大橋遺跡』

図版 1



遺跡周辺の航空写真 撮影：京葉測量株式会社（昭和42年撮影）



調査区



作業風景

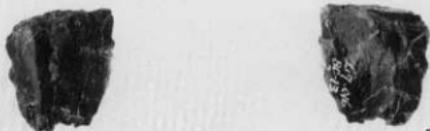
図版3



1



2



3

出土遺物

報告書抄録

ふりがな 書名	かしわしひかりがおかいせき 柏市光ヶ丘遺跡							
副書名	柏市光ヶ丘団地埋蔵文化財調査報告書							
卷次								
シリーズ名	財団法人千葉県文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第326集							
編著者名	大内千年							
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2							
発行年月日	西暦1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
D4-1号(新) 光ヶ丘	千葉県柏市 光ヶ丘1768 -51ほか	217	016	35度 49分 40秒	139度 57分 40秒	19961202 ~ 19970227	200	団地建設に 伴う事前調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
光ヶ丘	散布地	旧石器時代			旧石器時代石器			

千葉県文化財センター調査報告書第326集

柏市光ヶ丘遺跡

－柏市光ヶ丘団地埋蔵文化財調査報告書－

平成10年3月31日発行

編集 財団法人 千葉県文化財センター

発行 住宅・都市整備公団千葉地域支社

千葉市美浜区中瀬1-3幕張テクノガーデンD棟

財団法人 千葉県文化財センター

四街道市鹿渡809-2

印刷 株式会社 正文社

千葉市中央区都町2-5-5